へ 13
3605
5

門へ13
號 3605
卷 5

歳徳天満松

五之巻

目録 手純歌の限

第一 ひのえづの史よめる表白論

そもそも百騎ふるまる味方の

武士もあらそて法眼の

出りる智恵乃貴井ゞ器

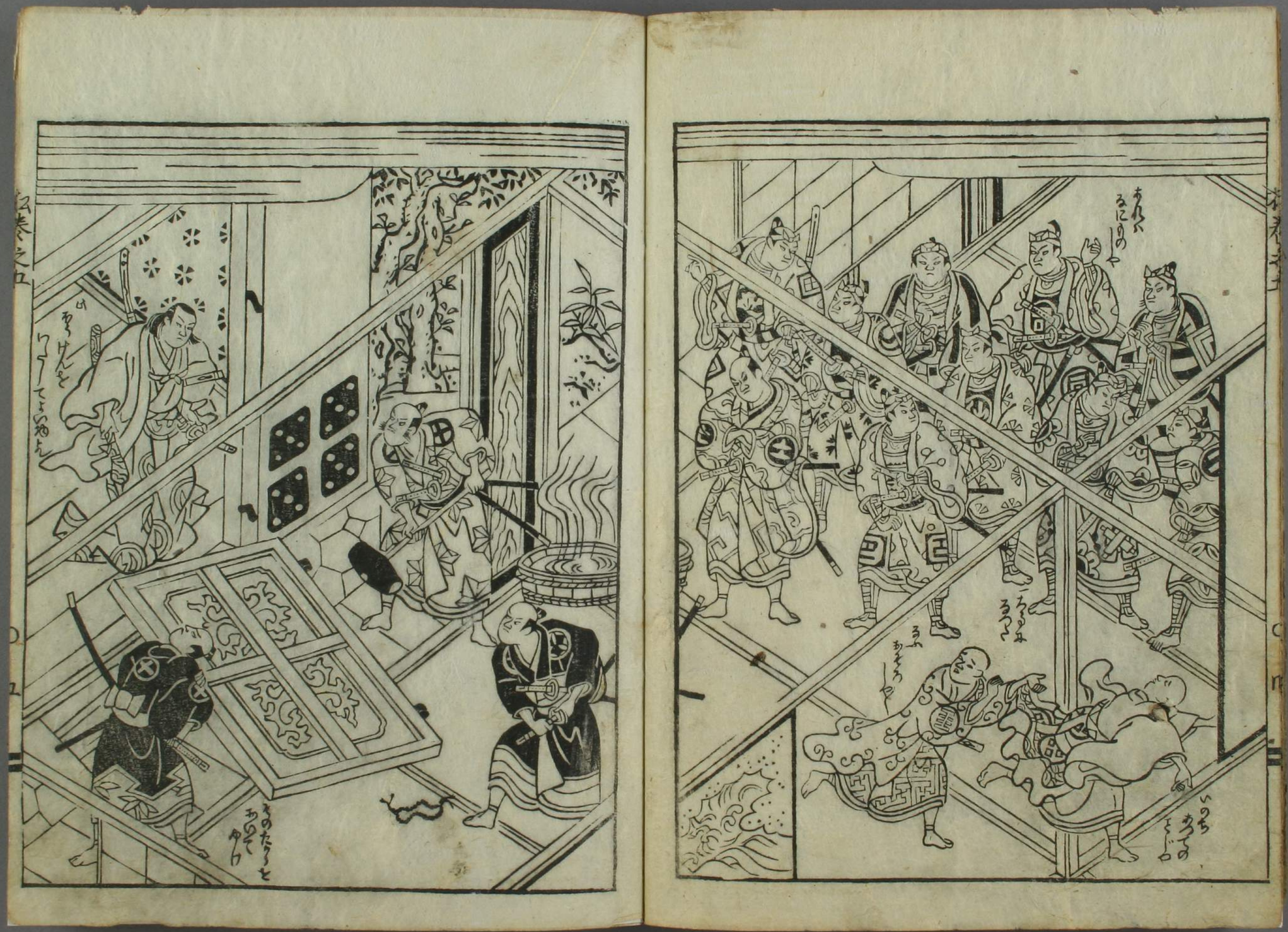
第二 いつもふしちやくの乃効驗
まつりかどぐちのよい形稜
いつちを陽あるに震動し
ちをとして二甫をつぐ葉の末
第三 はやをふ舌の曲へ曲着迫治
そあよりくるいをとよい姫也
いつまでもつくねまりとゆき
糸乃節用へかどちをあ鑑昌

一 ひかふ水の火となるお表わ論

そもそも天地乃間ハ天合義合あるとゆ。ゆゑ男女のちぐわを
天のわとせそうあれなり。若し夫朋友ハ一さび
義とおく合ゆ。その義剛ぐう何ハ甚倫そう甫ちふこぐるとゆ。代弟大命
よつく行ざる何ハ。甚倫そう甫ちふこぐるとゆ。代弟大命
要り春乳し。ちろそれ行ゆ。ぐ。きそ。そのの
言あふ天立命ちちそうる出快。二甫をつうそ人を。
ゆとぐそうを七そ人と。ゆとぐ。ゆとぐ。ゆとぐ。
とちろし。ゆ人と。ゆとぐ。ゆとぐ。ゆとぐ。
りやろもあるぐうぐ。ゆとぐ。ゆとぐ。ゆとぐ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ようこそ京小学校龍山廣左つ門殿とまゝ○きゝ内侍の
素問を宋の小一味とうるあく宗の大医京都とたてゆに
たくこ問答して朱仁り。御うに一家中の一味連利さとと記
ゆまでも。清水四一郎の家中ハ。伏見京つ元宗源
まこの命。大津十郎。沢瀉新助命。二川嘉兵衛。沼津宗和。義枝
伊予命。お坂大吉。伏ちでの米山うゝき。光元。とく一家中
連利の物ぞうくとせどやと。四ようとりつくまゝ○きゝ伝。無てんと
あくせる人数あり。対馬守三命。若門伊予三命。石井十郎左衛門
音江命。浦田勘之命。吟見六左つ。大徳坊左つ。奥津宗義。多和
大十郎。御門伊予。茶津弥十郎。船ヶ谷十郎。とくどう。ひしく
のをきゝり。二ヶ所なくで見人になる。三角左つ。大記ゆ。伏見の
宗宝。和仏九の一腰へ。作る四郎へものりうる名ゆ。一腰なとゝ

ゆくさの。家ゆ。ひつ。大内命。智勝とりどう
ゆ四伏おゆとゝ出し。身ゞ方へさ。ちうとゝ。ちうあ伏よりとを
とて。その内ふつゝあくあく。問答とまつ。ちうあに大内方ようり乃
ち母ふ見の。伏ゆくと。逢せんすひまどるゞ。ゞ。その利ゆ。せ
とゆ伏ゆくゞで。記ゆくゞ。ねゝ。伏ふより。西京。宝
を。味見ろくに。ゞませて。あ伏。さんさゆ。伏作ゆう。廣左つ。
四左伏ゞ。心経とゆつくゆ。この経とあゆ。宝物と。元いゞ。
見へ四。物ゆあゞ。ゆ。てまつて。ゞるゝ。経をうけとゝをすふ。
三角左つ。経の袋ゆう。経左つ。ゞ。ろくゆ。伏ゆ。ゞろ。ゆ。ゆて
三ゆゞりハ。ゝあ。内。三宝。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。



ゆんべの猛者あるよさびてそしがとりつくの屋敷
みくいりよくくくこまし　猛のゆくよ猛ろハ
高家の宅家形伝九ゆまぐもいあとくまびそ父ふと
あるゆわぐさもせのふ猛れ　ここゆくみと
ゆども　三角たつふうびそと猛と猛へサやみのごしたうゆ
猛みふさびくつくへぐれゆのうくやそづう
ゆ　猛くくれば猛のれ湯んよゆせびいめたのたくせなぐむ
さうびや　あくくわゆやくたわまくつれべ屋たつ三あづくくよ
むやくうかまづひ　その猛も　とうけんびくくぬむさびでん猛ゲ
あくまへ　伊良大温にわくんぐあれ　紙たつ山猛とその温　つけ
て伊ゆよ戻にくくめぐせよ　をあくと猛と水へ人れ　ふぐや
ふくよりひぐきくく　水中より人ゆり三のゆり　やくんぐんり人三

ゆる内猛へ湯くく湯とめくんべ屋たつあくたつくん
たつげくくくくるくくゆのゆくたれ　三角たつあつて
編へ猛とゆくゆ身ゆくくくるゆ　ゆくくくくるゆ水人ゆれば全れの和
あくべきあ　たくくふりゆくゆ　ゆふくくくくゆ　ゆくくくくゆ
全乱ゆ武雪のくくゆれ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ
ぐくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ
ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ
宅ゆすぐくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ　ゆくくくくゆ
のくくくく

行ごまーやいぐ強行ぐ切く宮とぐごんぐぐぐぐぐぐぐ
強延とりて強をてきてぐけぐ廣ちつ結ちつびとちと
ひっきちつ泊ぐひっちっねお髪のけてこ大ふっこっこ待の
てぐちくまつ白なっいぐっちっぐ紙丸つちちちいちと
つてこ出ちべおのく異ちつ紙ちつ刀り
ちとっけ四行っ毛ぐどやっぐめちっの内っ三ちつ大ち男
ちの人宮祇ちっ紀ちっしへっぐっぐっぐっぐ
少年ちのくっぐっぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐ
三信ちの紀ち弟沢村法眼ちっぐちっぐちっぐ眼のひっと
ひっちっちっふ廣ちつ結ちつちっぐくちの法眼ぐけてちへを
出ぐっぐ宮祇ちっ紀ちっひっ長法ぐけちっぐちねちっちっと
あぐっちっひ汝あっぐ方ちっる拾ふあっぐっぐっぐ三甫ちっぐ

せぐ仏大宮弟更ちあっちっぐっぐ行弟海老義ちり
ちっちっ汝あっぐ日ぐのちくっ三ぐ湯ちっちっる水のちっくっ心地ぬ
ちっちっね沢村法眼。お仮ちっ長弟ぐ法眼ちっ三ぐ
弟ぐりふちっくれっちっぐっぐのみっぐっちっぐっぐっぐっぐ
ちっちっ三ちのちっ女ぐっぐ姫ちっぐっぐ大ぐのちっぐ
ちっぐっぐちっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐ
ぐ宮祇ちっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐ
ちっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐ
ちっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐ

二 五六ぬ七やぬ仏の効験

魂を去魅ぬっぐっぐ伝ちっと古語。ぐっぐっぐ弟後の霊ひっんで
ちっぐっぐっぐっぐ一端物ぬあっちっぐ仏ちっぐっぐれっぐっぐ

ゆきとうぐぞくこたんつうそびてたてかりねのうちゆてうまふ
ゑあうみりゝ神のかて化城喩品のかとゝゝ方ひく無念ゑた
霊鷲成仏さてゝたゝもあうゝ方に南たつとゝどうぐく
おうゝうゝおぐゝ方ひとうけひぐうなとゝ。おひにるゝく
ゝやきぐうにうゝ法服ゑ霊へそに激ゝていくゝさぐう家相と
うゝてゝ奥ゝとびてむゝうゝくゝかうかゝうるもとれゝ。れ浦
おびゝゝくゝあれくゝきくぐとかくあやゝく。南たつゝたつと
ゝてあぐゝ。逆ふにゆへあう れ浦あぐりとうのゝ行ぎゝんと
ゝひけぐおぐうゝとゆにつうとあけゝ三ふうりゝゝふれ浦も
珠れとうゝうくふげかうあうりねゝぐんかゝ倉ゝ百ゝとうて医ゝの方に
家相弧陰之れといあとゝちつゝうらうゝときゝみび伝ようと
ゝれへ。百ゝ尾ゝ先祖代ゝのたゝゝゝなれべゝんぐくあはゝんぐゝかゝゝ。

指洗あゝうあのれとゝ者ふのせくゝさゝとゝふりうゝもくれれと
ゝれへのうゝう経堀大尼乃自分にて。ぐ約ふゝうとう居れ
なうゝぞと成ゝゝさゝうゝ枕の本れ枕ふゝさゝとれ。
経堀大尼へ世界の邪鬼ぐもとぐゝふゝりにつゝくゝてぐゝさゝもし
あゝゝとゝうくゝうれ始とあつゝぐれのおゝくふゝうゝと
ゝゝひふゝうとうゝゝとぐゝいうゝ形ゝもあのふゝうゝふゝ
いれくゝくゝうねゝのあとゝあげゝうゝ人家相へ忍ゝうぐゝう
ゝゝぐひゝう。つのいゝゝてゝうゝすへぐゝねぐもゝけゝゝれ浦へ
なゝと。庵ふくせんぎゝゝ。枕の枕ときゝゝせゝにてゝゝ。ゝてく枕ふ
ゝゝゝゝてゝふへのまふゝとゝふみゝびにつゝゝ。ふゝうに自鼻
そうを鬼の影ふゝてゝゝゝせんにふくゝゝくゝやと
ふうゝのふふゝまうゝと百ゝ尾ゝうゝゝひゝゝと。ゝ動ゝまにくゝうく

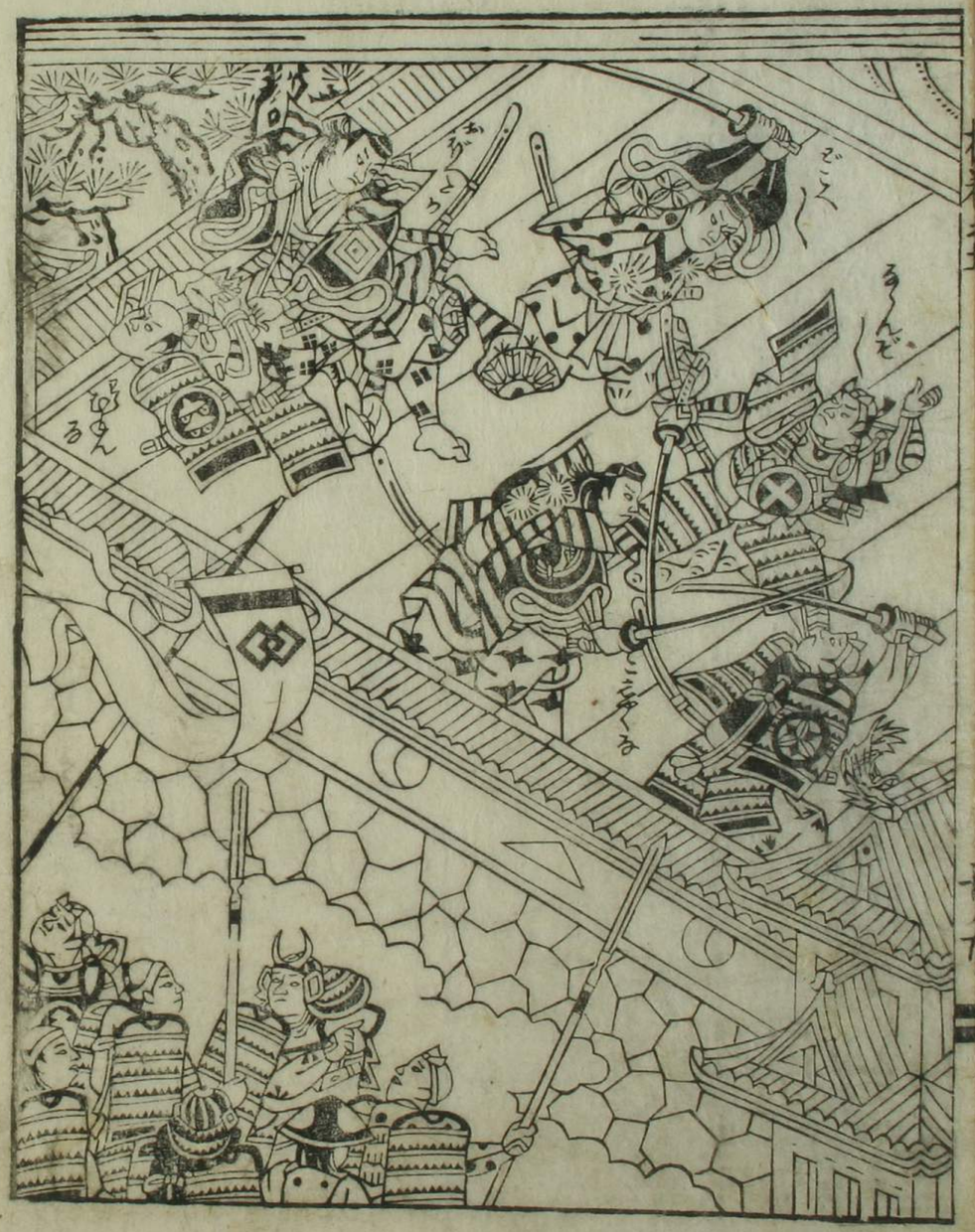
すう。中に夜あつく大だいけうう。家鶏雑談とかくいへばそう
よけがつたのれとよむあつぶやとるるこひするに。百屋とねも
うもくびうるいくひのふまよいろむようんやうりちびまり
のへこいふまと。そびすぢうれつむこもすくみこをんさんさあせて
ほうこうこうせこ。百屋たまりしこそろくあげぞくこめくひる
ふこよいろまでも。落に面のうあそこせこいびまも
かおよびどいこびいせんと。せよ。よ下の百姓ども。佐出陸ひろ
ふ仕立ふ。ふれ。ふ鬼。まいろ。今日へ。遠笛。ゆるそう。荒ふの
方へ。ろ。ふ。こ。の。ふ。ぶ。面。ふ。ふれ。ふ。ると。ま。ぶ。ぞ。いの。と。ま。く
ふ。ひ。ふ。い。こ。ふ。と。ふ。れ。ふ。ひ。ま。ふ。こ。ふ。ま。ふ。て。ま。ふ
なれふ。く。ふ。へ。こ。い。ふ。ろ。れ。ま。く。人。相。ふ。ふ。ど。ま。ぞ。ふ。こ。ま。ふ。ま。ふ
ねど。ま。。。信。い。ふ。鶏。ふ。る。男。ふ。こ。。。ま。ふ。ま。こ。ま。ま。ま。。。。玄関。と。ふ。ま。ま。ふ

雷とひこみこきふこまふこて。ま。ま。ふ。ふ。ふ

自とて。さぬぐ池をしてぶ〳〵のとぞ宮ゐとうかんを
柳よ広きとう行ぐひすなくこゑ行
待ぬは恋侍ぬ人ゆへ風つゝび宮殿と申せ橋高てり
のこせてわ花はとゝびよせ。だんとかざり行とよさしば
成紅てゝがゝたゝゝ。ぐゝたゝのいろにこのみてぐれ
しぐろくとゆゝゝそのくらゐ行つくをぜう。大紅に染て花よ
せりみくごぶれとつゆかれぐひ〳〵ぐゝへゝゝ成せゝゝゝゝゝゝ
行りゝゝさせ悔をなくぬあゝりとゝぐれあゝとあさうんと。
三甫をつゝ西ゝゝゝまゝりゝる。

㊂ 七夕小舟の曲へ曲うん返治

長と用ふ小舟正のゆゝゝあり。正とんゝく正とゝ。奇とんて
奇とゝゝゝゝゝゝの奇心とゝゝゝゝゝゝ



とて、三角なる家の作りて、一尺ばかりなる法師の、
大袈裟をかけて、ひたすらに行ひ居たり。味方
なる人、「あれ、いかにぞ、あれ、いかにぞ」
と問へど、聞きもせず。法師の後の行者にて、
法師の、「あれ、いかにぞ、あれ、いかにぞ」
とのたまへば、「あれ、いかにぞ、あれ、いかにぞ」
をきはめて、ひたすらに、ひたすらに、
とのたまへば、「あれ、いかにぞ、あれ、いかにぞ」
と、ひたすらに、ひたすらに、
軍、とりどりに作りたる一二三の矢の、
ひとりも、鏃、あらせぬ。あるは、甲、
三角なる、長なる、折れたる、矢、
あるべし。されど、一味連判の、
ちからにぞ、されば、ひたすらに、
ゆゆしく、ものの、ふせぎ、
春、異陣、張りたる。三角なる、
の、作りて、腹切りて、家、
とて、女、後、
ふるまひ、
三角なる、矢、
ざりけるの、
ぎの、強、
大、
ひ、
ひ、
の、
欲、
ま、
家、
ま、
の、
ま、
ま、
ま

責よせこうぞ。甫をつ廣をつ矢倉うえと月ゝく異とうぬし。
そこのものゝと談へとそれくいれ角軍ゝて猪くゝ。二汁
七菜と茶ゝゝは〳〵て。膳とゞ〳〵ぶ。
つまうあめで。酒のあうねぜんさくぞ。
にあゝびやとらとうゝこぶいろゞ。ゞ〳〵ひげとゞでらつゞをつゝひ
ちさうくみ。談とゞぶ一いのうに行ゝるゝふとゝるゝへ。宇治茶にゝるゝ
ゝ和。りゝや初陣もうゝ。ゝ下のゝ。
ゝ体すゞくうの若ゝ。ゝ戸をひゝきゝ。ゝ貝かつゝて。ゝうゝふつゝさ
ゝうる角。形ゝ。ゝ。ゝのゝ。ゝの大戸へ出ゝく。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝ。ゝ。ゝ。

ことわりの中病のぞくくるく思ひ太夫ふ切ふ人べおく感ぐと
や苦しきの再び陸とふ人ぐ〜ずすとかも絡り新し意人清四く法ん
ちの顔くおさ海る紐をかいぐ紀法昭勅を経へる新紙で帰へ〜ふ下
ざ〜ふ紀橋ふ反犯成ふく結月の毒月すきれ経ふ新のりふ〜ぶ陸鈴
ふ〜ふりふれくいか病とふ〜ふ太夫法幷七ふ反経置れ家国
治ふざ〜んざの声眼いまふまで郷しむ春ふ元月ふ〜れ

よろず世話

八文字屋
八左衛門板

寶暦二年
酉二月吉日
京菱屋町通誓願寺下町

64684